

小児科だより vol.15

胸のふくらみ パート1

2017.11.1 発行

こんにちは。だんだんと冬の気配を感じるようになってまいりました。小児科外来では、例年より早く、インフルエンザの流行が始まっております。当科では10月中旬より予防接種を開始しておりますので、お気軽にご相談下さい。

また、今年の11月号（小児科だより vol.3）に、『うちの子はインフルエンザのワクチンうったほうが良いですか？』というテーマで書いておりますので、参考にしていただけますと幸いです。さて、今月のテーマは、『胸のふくらみ パート1』です。



思春期になると女の子は胸がふくらみ、いわゆる乳房発育がはじまります。親御さんにとって心配なのは、男の子に見られた場合や女の子であっても通常より早く見られるようになった場合です。今回はパート1として、1～2歳の女の子に乳房発育が起こる場合についてお話ししたいと思います。

1～2歳の女の子で胸のふくらみがみられることは、珍しくありません。多くの場合、ほかの二次性徴を起こすことがなく、『早発乳房』と呼ばれます。『早発乳房』はお子さんの発育に影響がないので、治療する必要がありません。

一方で、ほかの二次性徴の兆候、例えば陰毛・腋毛の発生、性器出血や身長 of 急な増加などが伴う場合、『思春期早発症』という病気の可能性があります。通常、思春期に増加する女性ホルモンなどが、なんらかの理由で早い時期に増加することで、乳房発育やそのほかの二次性徴の症状が出てきます。

女性ホルモンは、骨に対しても作用し、骨の成熟が進みます。したがって、お子さんの身長の伸びかたや、手の骨のレントゲン写真などで骨の成熟の度合いなどを調べる必要があります。

実際に1～2歳で胸のふくらみのために小児科外来を受診されたお子さんが、『思春期早発症』であることは稀ですが、定期的に外来で胸のふくらみの推移や身長の伸び具合、ほかの二次性徴の兆候があらわれないかなどを診察して、大丈夫だということを確認しておくことで安心でしょう。

男の子や、もう少し年齢が大きい女の子の胸のふくらみについては、また機会を改めて、お話しさせていただきます。